◆特別掲載◆

中銀デジタル通貨の経済学

関　根　敏　隆

目　　次

1．はじめに
2．貨幣とは何か？（前置き）
3．暗号資産
4．ステーブルコイン
5．中銀デジタル通貨

1．はじめに

本日は「中銀デジタル通貨の経済学」についてお話をさせていただきたい。私が2020年７月末まで所属していた日本銀行では、中央銀行（中銀）デジタル通貨（Central Bank Digital Currency：以下、CBDC）の採用を決めたわけではない。ただ、そのフィージビリティーの検討のため、いろいろな研究を行っているところである。CBDCについては採用の是非、導入方法を含め幅広い視点から検討する必要があるが、本日はあえて経済学的な視点にできるだけ絞って説明したい。

説明の進め方として、まず前置きとして貨幣とは何かからお話しする。次にそれを踏まえながらデジタルな通貨として暗号資産やステーブルコインをどのように理解すべきかを説明し、最後に本題であるCBDCについてお話ししたい。

2．貨幣とは何か？（前置き）

貨幣には三つの機能があるといわれている。第一は交換手段であり、財サービスの購入において実際に支払う際に使われる。第二は価値保蔵であり、将来に向けて所得を保蔵する機能を有している。第三は価値尺度であり、貨幣によって価格が表示され値段の高低が測られる。

そもそも貨幣はなぜ使われるかについては侃々諤々の論争があり、私の恩師の岩井克人先生の『貨幣論』(注1）によれば、既存の学説として「貨幣商品説」と「貨幣法制説」がある。「貨幣商品説」

関根　敏隆（せきね　としたか）
一橋大学大学院経済学研究科教授。1987年東京大学経済学部卒業後、日本銀行入行。2001年オックスフォード大学経済学博士。97年国際通貨基金へ出向、00年調査統計局調査役、04年国際決済銀行へ出向、08年企画局参事役、10年調査統計局経済調査課長、12年高松支店長、13年国際局兼企画局審議役、15年調査統計局長、19年金融研究所長、20年７月日本銀行を退職し、８月より現職。

（本稿は、2020年９月７日にオンラインにより開催された日本証券アナリスト協会主催講演会の要旨である。）

©日本証券アナリスト協会　2021